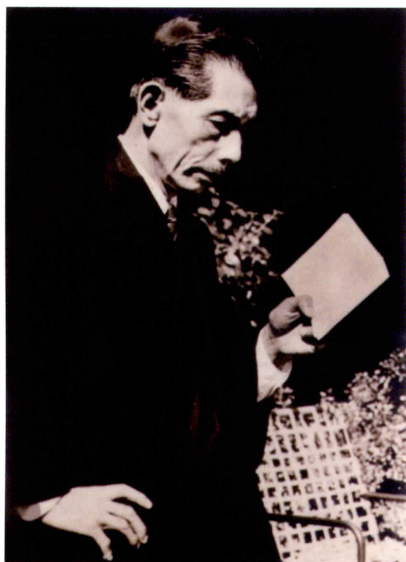


「命のビザ」をつないだ小辻節三

「百年以内に、誰か、自分をわかってくれる人が現れるだろう」

小辻節三は生前、家族へそう語っていた。



(写真提供 小辻家ご遺族)

<はじめに>

1940年(昭和15年)、ナチスドイツの魔の手から逃れるため、ユダヤ人たちはリトアニアの日本領事館に勤める杉原千畝にビザの発給を求めました。杉原が苦悩の末に発給したビザは、のちに「命のビザ」と呼ばれ、人道的行為の証として有名になりました。

そして、「命のビザ」を手にしたユダヤ人たちは難民となり、ヨーロッパからシベリア鉄道で大陸を横断し、苦難の末、日本にたどり着きました。

しかし、ビザには新たな問題がありました。

<新たな問題とは>

ビザは目的に応じて種類があり、ユダヤ難民たちが持っていたビザは「通過ビザ」で、短期間のうちに日本を出国しなければならないものでした。

短い人は3日、長い人でも2週間程度しか日本に滞在することができなかったのです。

今の時代とは違い、すぐに次の滞在国を見つけることや、渡航のためのチケットを手に入れるためには時間がかかる時代です。何か手を打たなければビザの滞在期限は過ぎてしまい、せっかく命をかけて日本にやってきたのに、またナチスのいるヨーロッパに強制送還させられる状況にありました。

この時、ビザの延長を訴え、日本から安全に次の国へと送り出したのが、「小辻節三」です。

<ユダヤ難民たちの実情>

昭和15年、満州鉄道の勤務を終え、鎌倉に住み始めた小辻は1通の手紙を受け取りました。それは、神戸に住むユダヤ人のリーダーからのものでした。

神戸には以前より、ユダヤ人たちのコミュニティがあったため、ヨーロッパから逃げてきたユダヤ難民たちは、そこに助けを求め、押し寄せました。あまりにも大勢の難民たちが流れ込んだことと、彼らの持つビザの滞在期限が迫っていたため、ユダヤ人コミュニティでは対処できなくなり、小辻に助けを求めたのです。

小辻は当時の日本では、数少ないヘブライ語の学者でした。満州鉄道で仕事をしていた時に、流暢なヘブライ語でスピーチをしたことがあり、その評判が知れ渡っていたため、神戸のユダヤ人のリーダーも小辻のことを知っていたのです。

難民たちであふれる神戸のユダヤ人コミュニティの状況と、一刻の猶予も許されないビザの問題を知った小辻は、すぐに行動する必要があると判断しました。

〈小辻の行動〉

この年（昭和 15 年）は、第二次世界大戦が始まり、日本はまさに太平洋戦争に向かって突き進んでいました。さらに、ユダヤ人を迫害していたナチスドイツと同盟を結んでいたのです。この年の少し前には、鎌倉にドイツのヒットラー青少年団が来訪し、約 5,000 人の町民が歓迎したという記録もあります。

このような日本の状況の中、小辻のような一民間人が 6,000 人ものユダヤ難民を救おうとしたことは、本当に勇気のいることだったのです。

小辻は、まず、鎌倉から毎日のように外務省へ行き、難民たちのビザの延長を訴えました。

当時は鉄道の便も悪く、物資が不足した時代でしたが、費用を自分で負担し、難民たちのために 12 時間かけ、鎌倉と神戸を何度も往復しました。小辻は、日本へ逃げてきた難民たちを必死に守ろうとしていたのです。

〈小辻と松岡外務大臣〉

ある日、外務省に行くと「今後は一切ビザの延長について動くな」と職員からおどされました。小辻は悩んだ末、ユダヤ難民たちのビザを延長させ、彼らを救うためには、ある人物に直接会うしかないと考えました。その人物とは時の外務大臣、松岡洋右でした。

実は小辻が満州鉄道で勤務していた時の上司が松岡で、のちに外務大臣となっていたのです。

松岡外務大臣と会う機会が得られた小辻は、「どうか、ユダヤ難民たちのビザを延長させてください。次の国が見つかるまで、日本に滞在できるようにしてください。」と切々と訴えました。

その話を聞いた松岡は「では、大臣としてではなく、友として話そう。」と、小辻にある秘策を与えました。

その秘策とは、「外国人の滞在許可は、神戸の自治体の管轄になるので、実際の窓口は警察になる。もし、神戸の警察を説得できれば、ビザの延長ができるかもしれない。それを君がやるといふのなら、外務省は黙認しよう。」というアドバイスでした。

そのアドバイスを受けた小辻は、すぐに神戸に向かいました。そして警察の説得に成功し、ユダヤ難民たちはビザを延長することができたのです。

<小辻に危険が…>

小辻の勇氣ある行動により、ユダヤ難民たちは次の国が見つかるまで、日本に滞在することを許されました。そして、昭和 16 年の秋頃までには、ほとんどの難民たちが日本から安全に、次の国へと渡って行ったのです。

しかし、小辻の行動は終わりませんでした。当時日本人が抱えていたユダヤ人に対する偏見をなくすために本を出版し、また全国で講演して回り、日本の人々にユダヤ人への理解を訴えました。

ですが当時、ナチスドイツと同盟を結んでいた日本において、小辻の考え方と行動は、かなり危険な思想であると見られていました。そして 1944 年（昭和 19 年）の秋、憲兵隊本部への出頭が命ぜられ、小辻はスパイ容疑で厳しい取調べと拷問を受けました。

のちに分かったのですが、この頃、小辻家には盗聴器が仕掛けられていて、特高警察や憲兵隊に監視されていました。当時、小辻の行動が日本の軍部にとって、いかに危険な行動と見られていたかが分かります。

<義を見てせざるは…>

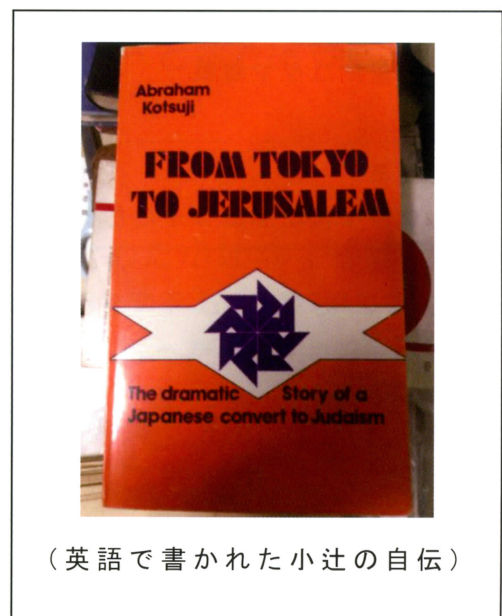
では、なぜ小辻はここまでユダヤ難民たちのために働いたのでしょうか。

もともと小辻家は、祖父の代まで京都の神社の神官でした。幼いころから日本の伝統的な環境で育った小辻は、さまざまな道徳的な考え方を学び続け、最後まで人としての生き方を問い続けた人物でありました。

その小辻にとって、ユダヤ難民たちを助ける原動力となったのは、幼い頃に学校で学んだ「義を見てせざるは勇なきなり」という言葉でした。「困難に背を向けるのではなく、人としての誇りを守る」という信念が大きな力になったのです。ユダヤ難民を救うことについて、小辻は自伝の中でこのように述べています。「…多くの日本人は難民の窮状には同情的でしたが、勇氣がなかったのを見て見ぬふりをしていました。…これから私がすることで、どんな試練が待っていようとも彼らを助けようと決めたのです。」

<鎌倉との関わり>

小辻の家は、昭和 15 年の秋から亡くなるまで、ずっと鎌倉にありました。つまり、ユダヤ難民のことで奔走する頃から、鎌倉での生活が始まったのです。住み始めた頃の長谷の様子を、小辻は自伝の中で次のように記しています。「…私たちの家は、海から間近で、浜からは小道を隔てたところにあった。家は大きくなかったが、三浦方面までの湾全体の景色を見渡すことができた。そこには、夜になると、回転灯の光が、私たちの寝室までぼんやり差し込んできた。お茶をいただく時、遠くの光と湾を見下ろすことができるこの場所を、私は愛していた…。」



(英語で書かれた小辻の自伝)

<まとめ>

小辻は、命をかけてユダヤ難民たちを救いました。

しかし、彼は「良い行動を決して隠す必要はない。だが、あからさまにすることは偽善への一歩になりかねないのである。」という考えをもっていたため、今日まで、小辻の偉業と功績は人々にあまり知られてこなかったのです。

1973（昭和48）年10月31日、小辻節三は74歳で亡くなりました。

その死について、イスラエルやニューヨークの新聞は報道しましたが、日本で大きく取り上げる報道はありませんでした。ユダヤ難民を救った小辻という英雄の死は、ひっそりとしたものでした。

亡くなってすぐに、遺体はイスラエルに運ばれました。生前、小辻が「エルサレムの地で眠りたい」と希望していたからです。小辻が亡くなった時は、ちょうど中東戦争のさなかで、イスラエルの空港は閉鎖されていました。

その空港の閉鎖を一時的に解除し、小辻を迎えたのは、かつてユダヤ難民として日本にやって来た、バルハフティック宗教大臣でした。さらに、助けられた大勢のユダヤ人たちが集まり、空港で小辻の遺体を迎えました。

また、空港での様子や葬儀については、ラジオのニュースでも報じられたため、墓地にも大勢のユダヤ人たちが駆けつけ、小辻の冥福を祈りました。

そして小辻節三は、今もエルサレムの地で静かに眠っています。

<参考文献>

| | 題名 | 著者 | 出版社・発行 | 発行年月日 |
|---|-------------------------|----------------------|-------------|------------|
| 1 | 命のピザを繋いだ男 小辻節三とユダヤ難民 | 山田純大 | NHK出版 | 2013年4月25日 |
| 2 | 自由への逃走 －杉原ビザとユダヤ人－ | 中日新聞社会部 | 東京新聞 出版局 | 1995年9月28日 |
| 3 | 日本に来たユダヤ難民 | リラフ・バルハフティク 滝川義人訳 | 原書房 | 2014年4月25日 |
| 4 | 歴史街道 杉原千畝とサムライたち | 辰本清隆編集 | PHP研究所 | 2013年10月4日 |
| 5 | ユダヤ民族 その四千年の歩み | 小辻誠祐 | 誠信書房 | 1965年5月1日 |

☆監修 山田 純大 （俳優・小辻節三研究家）

☆資料提供 小辻家ご遺族